

令和7年度 淀中学校のあゆみ —結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様に説明責任を果たすことが重要であると考え、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、学校が各調査の結果や各調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、各調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにし、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

1 「全国学力・学習状況調査」の調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 「中学生チャレンジテスト」の調査の目的

- (1) 大阪府教育委員会が、府内における生徒の学力を把握・分析することにより、大阪の生徒課題の改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図る。
加えて、調査結果を活用し、大阪府公立高等学校入学者選抜における評定の公平性の担保に資する資料を作成し、市町村教育委員会及び学校に提供する。
- (2) 市町村教育委員会や学校が、府内全体の状況との関係において、生徒の課題改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、そのような取組を通じて、学力向上のためのPDCAサイクルを確立する。
- (3) 学校が、生徒の学力を把握し、生徒への教育指導の改善を図る。
- (4) 生徒一人ひとりが、自らの学習到達状況を正しく理解することにより、自らの学力に目標を持ち、また、その向上への意欲を高める。

1 全国学力・学習状況調査

※中学校理科はICT端末等を用いた、文部科学省CBTシステム（MEXCBT）によるオンライン方式（以下、「CBT」【=Computer Based Testing】とする）で実施。

学年		生徒数 (人)	平均正答率(%)		平均無解答率(%)	
			国語	数学	国語	数学
3 年	学校	141	44	34	12.6	19.9
	大阪市	—	52	46	6.8	11.2
4月17日	全国	—	54.3	48.3	6.7	10.6

	平均IRTスコア
	理科
学校	434
大阪市	489
全国	503

※IRTとは、国際的な学力調査等で採用されているテスト理論です。

この理論を使うと、異なる問題から構成される試験・調査の結果を、同じものさし（尺度）で比較することができます。

※IRTスコアとはIRTに基づいて各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し、500を基準にした得点で表すものです。

2 中学生チャレンジテスト

学年		生徒数 (人)	平均点(点)					平均無解答率(%)				
			国語	社会	数学	理科※	英語	国語	社会	数学	理科※	英語
3 年	学校	135	57.6	43.7	45.5	40.4	46.6	9.1	7.7	14.9	14.0	9.7
	大阪市	—	64.8	51.5	54.3	46.5	54.4	6.1	5.8	11.1	9.4	6.5
	大阪府	—	64.2	51.2	53.9	46.0	53.2	6.8	6.5	12.1	11.0	7.4

※

令和7年度 淀中学校のあゆみ
—結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について—

調査結果から

【成果と課題】

○全国学力・学習状況調査

<全体として>調査結果からは、調査対象である今年度3年生のきびしい学力実態が明らかになった。特に「学力に課題のみられる生徒」と位置づけられる生徒の割合が概ね4割を超える高さであること、および、家庭学習をほとんど行っていない生徒の割合がかなり高いことについては、ここ数年の取組の成果が現れているとは言えず、継続して大きな課題である。

<国語> 平均正答率においては全国平均を10P下回っている状況で、この状況は、「話す・聞く」「書く」「読む」という領域による大きな差はみられない。調査対象が異なるので単純に比較することはできないが、正答率において昨年度結果を下回っている状況である。

<数学> 平均正答率においては全国平均を14P下回っている状況で、「数と式」「図形」「関数」「データの活用」という領域では、「図形」領域ではやや下回りの程度が小さいものの、「数と式」「データの活用」領域では、さらに下回りの程度が大きくなる状況となっている。調査対象が異なるので単純に比較することはできないが、正答率において昨年度結果を下回っている状況である。

<理科> 理科はテスト形式が異なるが、平均スコアが全国503Pに対して本校434Pで、学力状況が大きく全国を下回っていることについては、国語・数学と変わらない状況である。

国語・数学・理科だけではなく全学年の全教科において授業規律の確立と維持、教員の授業力向上と授業改善に注力し続けている。特に授業規律の確立と維持については日々の粘り強い取組の成果がようやくかたちとして表れていると認識しているが、教員の授業力向上と授業改善については学習意欲の低い子どもたちが多い現状と向き合うことに苦悩し、成果が十分に出ているとは言えない状況である。また、「学力に課題のみられる生徒」の状況改善に対しては、大阪市の学力向上支援事業の手厚いサポートを受け、さらに本校の学校元気アップ支援事業からのサポートも得て、特に補充学習の充実を図って改善を目指しているが、「放課後学習会」「グローバル教室」「土曜学習会」「夏季学習会」等のかなり充実した学習機会を確保できているものの、十分にその成果が状況改善に結びついているとは言えない。

○中学生チャレンジテスト 3年生

全体として、きびしい学力実態を示していることは、全国学力・学習状況調査の結果と同様である。平均正答率では府平均と比較して概ね7Pから8Pのマイナスとなっていて、教科による大きな差はない。また、平均無回答率では府平均と比較して概ね2Pから3Pのプラスになっていて、これも教科による大きな差はない。

授業規律の確立と維持、教員の授業力向上と授業改善に注力し続けていること。特に授業規律の確立と維持については日々の粘り強い取組の成果がようやくかたちとして表れていること。教員の授業力向上と授業改善については学習意欲の低い子どもたちが多い現状と向き合うことに苦悩して成果が十分に出ているとは言えない状況であること。それぞれが全国学力・学習状況調査時と大きな変化はない。

【今後に向けて】

十分な成果を実感できることに学校としての苦しみは大きい。しかし、授業規律の確立と維持、教員の授業力向上と授業改善に注力し、まず優先課題として「学力に課題のみられる生徒」の状況改善を目指す。大阪市教育委員会や学校元気アップの助けを得て補充学習機会の充実を図るという方向性は間違っていないと考えるので、今後も粘り強く状況改善に努めていく。中学生チャレンジテスト3年生が終わった時点でもこの方向性に変わりはない。